

2006 鳥の劇場オープニングプログラム 4 作品連続上演

活動実績報告書

2007.1



10月公演「人形の家」(撮影 米井美由紀)

**鳥の劇場**

〒680-0833 鳥取市末広温泉町 122-3F

TEL/FAX: (0857)23-2224

e-mail: info@birdtheatre.org

web-site: www.birdtheatre.org

## オープニングプログラムを終わって、そして次回に向けて

九月から始めたオープニングプログラムも無事終了となりました。鳥の劇場の活動のスタートを応援していただいたみなさまの思いに、心から感謝を申し上げます。

この連続上演は、想像以上にたいへんなものでした。鹿野という地での初めての活動であり、劇場を自分たちの手で作りそこにお客さんを迎えるという経験も初めてでありました。毎月四ヶ月連続で上演するというのも、また初めての経験でした。多くの新しい出会いに支えられて、私たちは、芸術集団として、今までの活動では得られなかったとてつもない充実や勇気をいただきました。そして、同時に活動を継続し発展させて行くことの難しさ、越えなければならないハードルの高さを強く感じもしました。今の私の中には、大きな充実とともに強い危機感があります。

11月の公演の時、お金がたいへんだというお話をお客様にしたせいで、「鳥の劇場は大丈夫なのか？」というご心配をいただいたようです。大丈夫ではありませんが、大丈夫です。来年も再来年も精力的に活動を続けて行きます。年明けは二月から鹿野で稽古を始めて、三月と四月に県外での上演を行い、鹿野での上演は五月から七月まで、年の後半にも連続上演を行います。

日本では、商業的でもなく、趣味としてでもないやり方で演劇活動を続けることはほぼ不可能とされています。しかも経済規模の小さい地方都市が私たちの活動の場です。しかし、地方だからこそ生活の中で継続的、持続的に芸術活動が行われ、それを見ていただくことに意味があるのだと思うのです。私たちは、多くの方の享受に耐える作品を発表して、喜んでいただきたい、生活の中に演劇が必要だと感じていただきたいと思っています。そしてそのために、いろいろな問題に取り組みながら、自分たちの活動環境を良くする、そしてみなさんにもっともっと楽しんでいただく。いい循環を作りたいと考えています。

「わかりやすい」「深い」「いっしょに感じ、考える」を鳥の劇場のモットーとしました。来年もこれに変わりはありません。来年は六ヶ月間、鹿野で上演します。毎月公演できるようにするのが私たちの目標です。どうかみなさん、来年以降も私たちの活動にご理解をいただき、応援してください。まずは興味と関心を持っていただいて、一人でも多くの方に作品を見ていただきたいと思っています。劇団メンバーを代表して深い感謝とともに、今後もより一層のご支援を切にお願いを申し上げる次第です。

なお、芸術面での成果および活動の今後の展望については、別書「2007年の活動計画 今後の展望 ご支援のお願い」をご覧ください。

鳥の劇場主宰 中島諒人

## 「鳥の劇場オープニングプログラム 4 作品連続上演」の概要

期間： 2006 年 9 月 23 日～12 月 24 日

会場： 鳥の劇場の鹿の劇場 / 鹿のスタジオ（旧鹿野小学校体育館 / 旧鹿野幼稚園）  
〒689-0405 鳥取県鳥取市鹿野町鹿野 1812 - 1

主催： 鳥の劇場

共催： 鳥取大学地域学部（鳥取県高等教育機関「知の財産」活用推進事業）

後援： 鳥取県、鳥取市、いんしゅう鹿野まちづくり協議会、新日本海新聞社、ノルウェー王国  
大使館（「人形の家」）

助成： 鳥取県文化芸術活動支援交付金、公益信託「とりぎん青い鳥基金」

## 鳥の劇場について

鳥の劇場は、2006 年、演出家中島諒人を中心に設立されました。現在、鳥取市鹿野町を拠点にメンバー 12 名で活動を行っています。

鳥の劇場の活動は、「わかりやすい」「深い」「一緒に感じ、考える」を軸に、

\*魅力的な演劇作品を作る

\*演劇活動を通じて社会に貢献する

\*活動の公共性が広く理解され、認知される

を目指しています。

## 主宰者プロフィール

中島諒人（なかしままこと）

演出家

1966 年鳥取市生れ

鳥取県立鳥取東高校卒業、東京大学法学部卒業

1994 年、東京を拠点にシアターカンパニー・ジンジャントロプスボイセイを設立

2003 年、舞台芸術財団演劇人会議・利賀演出家コンクールで最優秀演出家賞を受賞（受賞作品 イプセン作「人形の家」）

代表作品に、チェーホフ作「かもめ」、ソフォクレス作「アンティゴネー」、イプセン作「ヘッダ・ガブラー」「人形の家」、カミュ作「誤解」、デュレンマット作「老貴婦人の訪問」

国内各地だけでなく、韓国、ドイツ、ポーランドなどでも作品を上演

2006 年 3 月まで、静岡県舞台芸術センター所属、静岡文化芸術大学非常勤講師

現在、鳥取大学非常勤講師、舞台芸術財団演劇人会議会員

## 「オープニングプログラム」について

2006 年秋に行われた「鳥の劇場オープニングプログラム 4 作品連続上演」は、鳥の劇場にとって初めての本格的な上演活動となりました。このプログラムでは、鳥の劇場の活動の趣旨、そして目指すところを広く知ってもらおうとともに、演劇の魅力をより多くの人に感じてもらうことを目標としました。そのため、異なる趣向の 4 作品を選び、4 ヶ月連続という集中的な上演プログラムを実施しました。

鹿の劇場 / 鹿のスタジオ :

「オープニングプログラム」の会場となったのは、鳥の劇場の鹿の劇場（9月～11月公演）と鹿のスタジオ（12月公演）。いずれも、閉鎖されていた旧鹿野小学校体育館、旧鹿野幼稚園の施設を利用し、劇場空間を新たに立ち上げたものです。旧鹿野幼稚園は、鳥の劇場が鳥取市から正式に借り受けて専有しており、上演を行うほかにも、稽古場、事務所スペース、倉庫、また公演時のホワイエとしても利用しています。

鳥の劇場では、作品づくりとともに、劇場という「場」を作ることに力を注いでいます。作品発表だけのためではなく、人々が集まり文化の拠点となる劇場が必要だと考えるからです。「オープニングプログラム」は、このような拠点づくり、劇場づくりの第一歩でもありました。



正面 鹿の劇場（旧鹿野小学校体育館）、右手 鹿のスタジオ（旧鹿野幼稚園）



劇場への正面入り口（鹿のスタジオ）

## 9月公演

「貴婦人故郷に帰る」

作 F・デュレンマット

演出 中島諒人

2006年9月23日(土)、24日(日)午後6時半開演

鳥の劇場の鹿の劇場(旧鹿野小学校体育館)

入場者数 23日 152人、24日 110人、合計:262人

### 観客の反応(アンケートより抜粋)

「スゴイ、スゴイ。久しぶりに演劇というものを感じました。皆様の熱演に感激です」(59歳 女)

「何回か練習を見学させていただきましたが、そのときとまったくちがいました」(15歳 女)

「言葉の聞き取りにくい部分がたくさんありました。小さな声の方が聞き取りやすいという現象もありました。音響箱としての劇場に問題ありと感じました」(66歳 男)

「人間のエネルギーの発露といった演劇の魅力に堪能できた」(54歳 女)

「生の演劇を初めて拝見しました。生の迫力に圧倒されました。手づくりの会場、雰囲気もとっても気に入りました。何故か日常を忘れられるような感覚を覚えました」(35歳 男)

「芝居を敬遠していた者にも分かり易く、心に響く公演でした」(32歳 女)

「鳥の劇場と一緒に鹿野も発展していくような気持ちになります」(25歳 女)

「本物を見ることが出来たように思っています。この鳥取に文化の輪が広がっていくことを嬉しく思い、また期待しています」(32歳 女)

「鹿野という場所と『鳥の劇場』がしっかり合っていて、あたたかい手作り感が良かったです」(32歳 女)



9月公演「貴婦人故郷に帰る」(撮影 米井美由紀)

## 10月公演

「人形の家」(「イプセンイヤー2006」関連企画)

作 H・イプセン

演出 中島諒人

2006年10月28日(土)、29日(日)午後6時半開演

鳥の劇場の鹿の劇場(旧鹿野小学校体育館)

入場者数 28日 167人、24日 112人、合計:279人

作者イプセンの没後100年を記念する「イプセンイヤー2006」の関連企画としてノルウェー王国大使館の後援を受け、同大使館の文化担当参事官が来場。

「鹿野わったいな祭り」に参加。

### 観客の反応(アンケートより抜粋)

「とてもすばらしかった。ノラの生き方に共感する」(53歳 女)

「想像以上のレベルの高さにまずびっくりしました。簡潔な舞台で、ここまで表現出来ることにも驚きました」(47歳 女)

「ノラがその後どうなったのか気になります」

「砂の舞台の理由が最後の最後で、合点がいきました」(20歳 女)

「初めて、本格的な演劇を近くで見られました。とても素敵でしたし、すごいな、演劇ってすごいなって思いました」(22歳 女)

「難しい主題で考えさせられました」(30歳 女)

「頑張っておられるのはよく分かりますが、もう少し力を抜いて演技されたらよいと思った」(55歳 男)



10月公演「人形の家」(撮影 米井美由紀)



## 11月公演

### 「誤解」

作 A・カミュ

演出 中島諒人

2006年11月25日(土)、26日(日)午後6時半開演

鳥の劇場の鹿の劇場(旧鹿野小学校体育館)

入場者数 25日 72人、26日 120人、合計:192人

### 観客の反応(アンケートより抜粋)

「感動しました。親子関係のテーマですが胸にドーンとききました。母親役の痛み、そして娘の悲しさがとても深く演ぜられていました」(60歳 女)

「今回3回目です。だんだん独特の世界になじんできた、というか、身近になってきました」(女)

「この度の作品が一番しっくりきたように思います。(多分、日本人の無常感に通じるものがあるように思いました)」(56歳 男)

「この空間がすばらしい。足を踏み入れたとたん、すでに芝居の空気につつまれ、ドキドキした。日常から一気に非日常へと心が飛んだ」(女)

「神に訴えかける言葉などはなじみがないのですんなりと移入できなかった」(24歳 男)

「歩いて劇場に行けるなんて今まで考えもしなかった。とても嬉しい」(63歳 女)

「いろいろ考えさせられました。自分のこと、存在と重ね合わせる部分があってとても心にずっしりきてしまいました」(女)

「回を重ねるたびに感動が深まってゆく。演劇とは無関係だった自分にとってこれは何なのだろうと考えています」(49歳 男)



11月公演「誤解」(撮影 米井美由紀)

## 12月公演

「班女」「葵上」

作 三島由紀夫

演出 齋藤啓（「班女」）中島諒人（「葵上」）

2006年12月23日（土）、24日（日）午後1時・6時半開演

鳥の劇場の鹿のスタジオ（旧鹿野幼稚園遊戯室）

入場者数 23日昼 86人、23日夜 65人、24日昼 54人、24日夜 79人：合計284人

鹿のスタジオでの初上演。昼公演も実施。

鳥取市長が来場。

### 観客の反応（アンケートより抜粋）

「9月～12月の公演を見せていただきました。それぞれ作風が違って面白かった。連続して見ることと色々な側面が見れてよかった」（30歳 女）

「（葵上）は新しい三島の世界を見せていただきました。笑いの聞こえる三島は初めてです」（33歳 女）

「役者さんたち、とても良かったです。ただ班女と葵上でもっとトーンの違う演技も見てみたかったです」（33歳 男）

「鳥の劇場のめざしていること、共感します。この地に志をもって活動しておられる人たちがいらっしゃるということを、とてもうれしく心強く思います」（43歳 女）

「ものすごい迫力で、引き込まれました。近くで見れるので、演者さんの顔の表情もよく分かり、良かったです。葵上で紙吹雪を客席のところまでかけてくれたのは良かったです」（22歳 女）

「役者の汗や鼻水やつばも...声や体温をごくごく近くで感じながら観るのが、本当の演劇なんじゃないかと思いました」（35歳 女）

「車を駐車する所から、帰るまで良かったです」（34歳 男）

「会場のかんじがとてもおもしろく思いました。お金をかけてではなく、知恵をしぼってたのしんで工夫しているのがよい感じで、今後のどの分野にも必要なことでしょう」（62歳 女）

「体育館よりもすごく表情がわかっていい。でも遠くから全体がみえるのはいい」（41歳 女）

「4回つづけて鑑賞し、演出家・劇団の意図が少しだけ感じられてきた気がします」（62歳 男）



12月公演「班女」「葵上」（撮影 米井美由紀）



### 観客動員について

客席収容人数：鹿の劇場（旧鹿野小学校体育館）170人 / 鹿のスタジオ（旧鹿野幼稚園）80人

動員数：

9月 262人（夜2回／鹿の劇場）、10月 279人（夜2回／鹿の劇場）、11月 192人（夜2回／鹿の劇場）、12月 284人（昼2回・夜2回／鹿のスタジオ）、総動員数 1,017人

観客動員については、予想通り、もしくは予想以上の成果を上げることができました。アンケートの結果など見ても、小学生から70歳代の方まで、幅広い年齢層の観客であったことがうかがえます。観客の大半は旧鳥取市内在住でしたが、12月公演では昼公演を実施したことにより、県内の他地域、県外からの観客が増えた模様です。今後は、徒歩で劇場を訪れる地元鹿野の観客から、飛行機を利用して来る観客まで、各層の観客を増やしてゆくために、幅広い対応が必要となるでしょう。また、鹿野、三朝の周辺観光地との連動を深めることで、劇場を「観光」の中に位置づけていきたいと考えます。

### チケット

チケットの種類及び価格

大人2,000円、中高生500円、小学生以下無料、ペアチケット3,000円

4演目セットチケット6,000円

取り扱いプレイガイド

鳥取県民文化会館、定有堂書店、いんしゅう鹿野まちづくり協議会（鹿野ゆめ本陣）、倉吉未来中心  
チケット総売り上げ：1,270,500円

次回からは、ペアチケットを販売しない予定。安価で観劇できる環境を維持しながら、チケット収入を確保することが必要となります。また、動員を事前に把握しやすくするため、チケットの日時指定を検討しています。



鹿のスタジオ（旧鹿野幼稚園遊戯室）の客席

## 事業収支

添付の収支報告書をご覧ください。

## 劇場化への取り組み

- \* 駐車場は、旧鹿野小学校の校庭を利用しました。
- \* 鹿の劇場（旧鹿野小学校体育館）には暖房がないため、11月公演では観客に毛布を配布しました。
- \* トイレの改善に関するご意見を多数いただきました。（幼稚園の施設のため、便器が小さい、男女共用であるなど）。
- \* 9～11月公演では、終演後にホワイエでお茶、水、ジュースなどを出す。12月公演では、劇団員が地元の方々の協力を得てぜんざいをふるまったほか、鹿野に焙煎所を持つ「丸達」コーヒーにご協力いただき、コーヒーを提供しました。

飲食が可能なカフェの設置を検討しています。鳥の劇場を、公演がないにかかわらず、人が集まりやすい、集まる劇場にしてゆきたいと考えます。（カフェの営業については、12月公演でアンケートを実施し、多くの方から賛同を得ました。）

昼公演を可能にするため、鹿の劇場（旧鹿野小学校体育館）の遮光方法を検討しています。

## 送迎・有料託児サービス

- \* JR 浜村駅 会場間の送迎サービスは、毎回の上演で10人前後、最大で20人の利用がありました。
- \* 託児サービスも、ばらつきはありましたが、毎公演、利用がありました。

両サービスとも好評でしたが、特に託児の場合、サービスがあることを知らなかった方もかなりいました。告知をより徹底させていく必要があると考えています。



鹿の劇場（旧鹿野小学校体育館）の客席

### 戯曲講座などの関連プログラム

- \* 稽古、大道具の制作など、作品づくりのプロセスは原則的に公開としました。
- \* 「オープニングプログラム」期間中に予定していた戯曲講座は、公演準備のため、すべて中止にせざるを得ませんでした。これは大きな反省点の一つであり、今後は、作品上演と平行して戯曲講座、学校などへの「出前」公演を行うことが出来る体制作りを進めてゆきたいと考えます。

### 宣伝・告知

- \* 「オープニングプログラム」のチラシは約 2 万部製作し、ポスターとして鳥取・鹿野地域に掲示したほか、県内の他公演への折込、県内、中四国を中心とした県外の劇場、ホールに配布しました。
- \* 日本海新聞、朝日新聞と毎日新聞の鳥取版で紹介されたほか、NHK 教育テレビ「芸術劇場」(11 月 19 日)で取り上げられ、全国に放映されました。

チラシ配布の効果などで、存在を印象づけることには成功しましたが、鳥取市内でもまだまだ十分に浸透しているとはいえないようです。今後は、よりいっそうの告知活動を行っていくと同時に、鳥取県中西部での告知を積極的に行いたいと考えます。

各公演前には、二日間、プレス向けの公開リハーサルを行いました。参加した報道関係者はほとんどいませんでした。今後は、より有効的なメディアでの取り上げ方を探していきたいと思えます。

### 鳥の劇場と鹿野町

これまでの鳥の劇場の活動は、公演時のみならず、多くの鹿野の人々の協力を得て成り立っています。送迎車の運転、駐車場の誘導、看板の設置など、その大半はボランティアで行われているものです。今後とも良好な関係を維持していくとともに、鳥の劇場の活動が鹿野町にとって利益をもたらすものとなることにより、お互いにとって有益な関係へと発展させていきたいと思えます。



開場前の風景 鹿のスタジオ（旧鹿野幼稚園）



